

【図書館本棚リレーに寄せて】

この度、岸和田市図書館様より本棚リレーのお話をいただき、僣越ながら自分の本棚の中から、「ご紹介したい」本をあげさせていただきました。
普段馴染みのない「能」にまつわる3冊と、ちょっと毛色の違う2冊。
with コロナが日常になり、お家で過ごす時間が増えた今日この頃。本との時間で心を緩めていただけたら嬉しいです。

杉江能楽堂
事務局 伊地知佳香



「風姿花伝」 世阿弥 市村宏 全訳注 講談社

能というと、普段なじみのない伝統芸能というイメージがありますが、現存する世界最古の舞台芸術で、2008年にはユネスコの世界無形文化遺産に登録された「世界に誇る日本の伝統芸能」です。

『風姿花伝』は世阿弥が父の観阿弥の教えを基に書いた能の理論書で、世阿弥自身が会得した芸道を踏まえた著述となっています。

600年以上も前の言葉とは思えないほど、自然に心に入ってくる。それは物事の本質、核心を捉えているからかもしれません。

「初心忘れるべからず」「離見の見」「秘すれば花」など、ハッとさせられるものの捉え方が新鮮に刺さり、現代のビジネス書として、今の人が読んでもためになる名著です。

ちなみに、こちらの本は、原文、訳注、現代語訳、解釈と展開されますので、読み物というより勉強する感覚に近いかもしれません。



「能楽ものがたり 稚児桜」 澤田瞳子 淡交社

第163回 直木賞候補作品で、能の名曲をベースにした8つの短編集。

“能楽ものがたり”とあるだけに、能の知識がないと難しいと思われるかもしれませんが、知識がなくとも人間の業、哀しみ、憎しみ、そこからくる戒めなど、様々な感情が巧い描写で展開される、読みやすい時代小説です。

元の曲の大胆なひねりっぷりが見事で、登場人物や景色、文章から漂う空気感と、「人のエグさや強さ」とのギャップが、人間臭い「美」と「醜」をリアルに魅せてくれます。

個人的には、表題にもある「稚児桜」が印象的。父親に身売りさせられる不幸な生い立ちを持つ主人公花月のお話。

人の心模様は昔も今も変わらず、繰り返され、普遍的であるがゆえに脈々と能が現代まで受け継がれているのかもと感じます。



「まんが能百番」 渡辺睦子 平凡社

能一曲につき、説明で2ページ、マンガで2ページと簡潔にまとめられていて、あらすじが大変わかりやすく紹介されています。曲についての解説や能を見る際の心構えといった豆知識もあり、特に能に馴染みのない方にもおススメしたい一冊。

「能は何をいっているのかわからない」ことから、なかなか敷居が高いと思われがちですが、マンガなら年齢問わず「能を知る気軽なきっかけ」として手にとっていただけるのではと思いご紹介いたします。

この「まんが能百番」で、たくさんある能の中から一曲でも、「このお能、見てみたい」と興味を持っていたら嬉しく思います。

入り口は何でもいいのですから。



「結婚しなくていいですか。」 益田ミリ 幻冬舎

主人公のすーちゃんは36歳、独身。彼氏なし。ゆる〜いタッチの4コマ漫画風の作品ですが、恋愛、結婚、仕事、さらに介護、老後のことなど、中年独身女性の日常にある、悩みや不安がリアルに描かれています。「思うことはあれど、それをいちいち人に打ち明けることではない」ような日々のモヤッとした、誰しも持っている葛藤に「あるある！」と共感してしまいます。

笑わせられたり、ちょっと凹む部分もあったり優しさを感じたり、ほろっときたり・・・軽い画風ですがなかなか深い内容。

またすーちゃんと立場の違う友人さわ子さんのエピソードも刺さります。さわ子さんは、女性同僚の何気ない言葉(セクハラ)に覚える不快感に対しよう考えます。「でも慣れたりしない。慣れることは許すこと。こういう鈍感な言葉に傷つくことができる私でいたい。」共感したフレーズ。



「老後の資金がありません」 垣谷美雨 中央公論新社

読み始めて最初の数行で面白い展開になりそうと予感したものの、テンポのいい話で一気に読了した作品です。映画化にもなりました。

主人公の篤子さんのキャラクター、ちょっと歯がゆいところもありますが、気持ちはすぐわかります。娘の結婚費用、舅と姑にかかる仕送りやら葬儀代やら義姉夫婦のこと、さらには夫婦そろってのリストラから、蓄えていた老後の資金がどんどん目減りする恐怖！また、その問題にまつわる人間関係や、家族・親戚・友人に対する「見栄」について、確かに日ごろの「あるある」ですが、人にさらけ出せない「あるある」でもあり、ハラハラしつつ、つい笑ってしまうほどです。

老後の資金、「いやいや、自分にも起こりえるかもしれない・・・」、けどコミカルな展開に悲壮感や絶望感とは思議とありません。

老後の資金だけではなく、私たちのまわりの「大事なもの」「大切なひと」について、明るく問いかけてくれる一冊です。

杉江能楽堂から、図書館をご利用の市民のみなさまへ



杉江能楽堂は、岸和田藩最後の藩主岡部長職公のご下命を賜り、観世流シテ方杉江櫻園により建立されました。

そして、大正6年（1917年）から現在まで103年もの間、当時の姿をそのままに今も静かに息づいています。

世界無形文化遺産であり、650年も脈々と続く日本の伝統芸能「能」。それを披露することのできる能舞台、白洲や庭・別棟の見所という古典的な構成（対置式）に素晴らしさ、特徴があります。

歴史的な価値がありながら、永らく非公開でしたが、この能楽堂を護り、先人たちの業績を後世に繋ぎ、歴史的意義と文化振興に活かすことは、残されたものの使命であると考え、令和元年より一般に公開を始めた次第です。

まずは「岸和田に、住まう町に、歴史的な文化財産が生きている」ということを知っていただくため、この一年、少しずつですが催しや学校の社会科見学の受入れなど展開してきました。

目下の目標は自主公演での能公演です。本来5月31日に予定をしておりましたが、このコロナ禍により延期となりました。公演日は未定ですが、地元の皆様にも能を身近に感じていただける催しにしたいと考えております。

「埃に埋もれた能楽堂という宝物を、まちの誇りに」、そう一人でも多くの方に認知していただけるよう取り組んでまいります。どうぞ皆さま、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。